NEWSLETTER No.78
ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music
Jan 31,2010

社団法人
東洋音楽学会
会　報
第78号

発行 (社)東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号　TEL/FAX 03-3832-5152
E-mail : LEN03210@nifty.com　ホームページ : http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/

目　次

第 60 回大会レポート …… 1
ICTM（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ …… 10
ICTM 音楽考古学研究会の報告 …… 11
会員の受賞 …… 12
通常理事会・総会議決事項のお知らせ …… 12
会費納入のお願いとお知らせ …… 12
第 27 回 田邉尚雄賞アンケートのお願い …… 13
会員異動 …… 13
図書・資料等の受贈 …… 15
新刊書籍 …… 15
新発売視聴覚資料 …… 16
編集後記 …… 17
第 40 回通常総会議事録（抄）・添付書類 …… 18

第60回大会レポート

（2009年10月17～18日／沖縄県立芸術大学）

第１日（10月17日）

第 60 回大会の公開講演会では、「人の移動と音楽」をテーマにして、ふたつの講演が行なわれた。金城厚氏による「人の移動と音楽―沖縄の場合―」と、寺田吉孝氏による「音楽とグローバル化―移動から環流へ―」である。

金城氏は沖縄という歴史的、地理的にアジアの中継点として栄えた地域を通時的に捉え、東アジアから東南アジアに広がる音楽文化を俯瞰し、日本の音楽文化の捉え方に対するオルタナティヴな視点を提供された。「移民」を鍵語にして、中国からの沖縄への移民であった閩人とその集住地域の久米村、その出身者が築いた音楽文化の基層、島津氏支配下での「江戸上り」における楽師の役割が示された。近代以降、関西や愛知への移動が著しくなり、ムラから都市に出た人びとが都市で伝承を重ねて地元に帰って演ずる、という形も述べられた。さらに 20 世紀前半のハワイへの移民の状況から、沖縄音楽の国際的発信の姿も示された。沖縄の人びとの「移民」という移動を音楽文化面でみると、２点が興味深かった。ひとつは、三味線が人の往来を伴わない異文化受容であった点、もうひとつは、移民の人びとが貧しくとも三線だけは必ず持っていく、という点である。ふたつの重要な楽器の対照的な意味に、沖縄を軸とした音楽文化研究の深さを実感した。金城氏は沖縄の学生たちによる沖縄音楽研究を適宜紹介し、それによって現在の沖縄研究の最先端を知る機会を多くの会員や一般の方々に供してくださったことに、会員を代表して感謝したい。

寺田氏はインド音楽の現在を中心にして、「音楽がグローバルな人的、経済的ネットワークに不可分に組み込まれて」いる状況の中で、人や音楽が単に「移動」だけでなく「環流」している、という刺激的かつ現代的切り口で語られた。金城氏の通時的な軸に対し、寺田氏は共時的な軸上で、現代の刻々と変化する状況での伝統音楽のあり方とその文脈を、インド音楽が「環流」する姿で呈示された。NRI（Non-Residential-Indian）と呼ばれ、日常的に各地を往来するロンドン在住インド人の活動を中心に、豊かな経済力を背景にした在外インド人コミュニティによる、「母国」の音楽文化への発言力の増大が、伝統音楽の新しいあり方への原動力となっていることが示された。1978 年から開催されているオハイオ州クリーブランドのティアガラーシャ音楽祭のような、NRI が音楽団体を設立し、著名演奏家をインドから招聘する活動や、ロンドンにおけるタミル人コミュニティのタミル学校での音楽と舞踊の伝習など、インド、スリランカと欧米諸国間の盛んな往来が例示された。音楽学の研究がグローバルなネットワークというコンテクストの中で議論される段階にあり、音楽学という研究分野が現代の文化に対して発信する力が強いことが、ここ

に示唆されたことは、本学会の社会的貢献という点で重要な意味を持つと考えられる。　　永原恵三

沖縄県立芸術大学学生による踊り

◇懇親会・田邊尚雄賞受賞祝賀会

第 26 回田邊尚雄賞授賞式は、大会第１日の公開講演会終了後行なわれた。今回の受賞者は田中多佳子氏で、受賞対象は『ヒンドゥー教徒の集団歌謡―神と人との連鎖構造』（京都：世界思想社、2008 年２月発行）であった。田邊尚雄賞選考委員会委員長の佐藤道子氏より受賞理由が述べられ、金城会長から賞状と賞金が田中氏に授与された。田中氏は第 60 回大会という節目の大会で受賞できたこと、そして長年の研究の成果がこのように評価されたことへの感慨と感謝を述べられた。

通常総会終了後、受賞祝賀会と懇親会が、学生食堂において行なわれた。竹内有一氏の司会進行で、会長による開会挨拶に続き、琉球舞踊３題が、大塚拜子氏による解説を交えて演じられた。演目は「かぎやで風（カジャディフー）」、「かせかけ（カシカキ）」、「谷茶前（タンチャメー）」で、沖縄県立芸術大学の学生たちによる踊り、歌三線、箏、笛、太鼓であった。舞踊鑑賞後、小島美子氏の乾杯で和やかに懇親の会となった。中頃に尾高暁子氏から田邊賞受賞者への祝辞があり、田中氏への温かなメッセージが贈られた。懇親会は後半になって、さすがに沖縄らしく、新城亘氏、マット・ギラン氏などの飛び入りでの民謡の演奏があり、両氏による八重山のトゥバラウマの掛け合いでは、沖縄の人びとがもつ自由なつながりの風土を存分に感じることができた。会の担当の皆様に大いに感謝したい。　永原恵三

新城亘氏、マット・ギラン氏による演奏

第２日（10月18日）

◇研究発表１A（司会：茂手木潔子）

「六筋がけ」の三味線について　　蒲生郷昭

蒲生氏の発表は、井原西鶴『好色一代男』等に見える「六筋がけ」の三味線について、国文学の分野で行われている「三味線の糸の太さ」、引いては「普通の三味線糸の六筋分に当たる太さ」などとする理解に疑問を呈し、日本音楽史の立場から研究の端緒を開いたものである。配布プリントにおいて用例が全て提示された上で個々の検討が行われ、さらに辞典類における語釈の変遷についても検討が行われた。なかでも野間光辰校訂・校注担当『定本西鶴全集』（1951年刊）において、それまでに存した弦数説を敢えて削除した可能性が指摘されたのは重要と思われた。「六筋がけ」の語感から弦数説が提起されるのはごく自然に思われるが、それが排されていく経緯があぶり出されてくるからである。もっとも蒲生氏はここでは語釈の振幅を示したのであって、弦数説を支持するのではないようであった。今回の発表では蒲生氏の「六筋がけ」の解釈が明示されるには至らなかったが、この語の解釈は初期の三味線の実態の解明とも関わる問題であろうから、蒲生氏の洞察によって、いずれ新しい解釈が示されるのを楽しみに待ちたい。　　遠藤徹

紀州徳川家蔵楽器コレクションの調査報告

高桑いづみ

高桑氏の発表は、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館所蔵の紀州徳川家伝来楽器コレクションについて、平成18年度から平成20年度にかけて行った調査の成果から、龍笛27管に

関する見解を示したものであった。当コレクションには江戸期の鑑定書が付されたものが多くあるが、その正否を確かめる意味もあってX線での調査も行ったとのことであった。配布プリントにおいて27管の製作の特徴、X線の結果、由緒書などがまとめて提示され、プロジェクタで代表的な例の画像も映し出された。X線の結果、おもりが仏像の形状となっているものが発見されるなど興味深い事例も示されたが、江戸期の鑑定に対していかなる結果が出されたのかは特に言及がなかった。このようなX線撮影はそう度々できるものではないであろうから、報告書においてX線撮影の年代比定に対する有効性について、何らかの見解が出されることを望みたい。なお発表者から言及はなかったが、今回の歴博の調査では、筆者等によって付属文書（由緒書を含む）や楽譜類の調査研究も行われた。共同研究の構成員は歴博のホームページでも公開されており、この度の発表で示された龍笛に関する見解は、その構成員全員の共通見解に基づくというかたちのものでは無いのであるから、共同研究の中での本発表の位置付けや提示した見解の責任の所在は明示されるべきであったろう。　遠藤徹

17世紀の胡弓―半球型胴の多様性と新史料―　竹内有一

竹内氏の発表は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター2008年度共同研究「胡弓の源流と受容―東西交渉の視点を中心に―」から、(1)「らべいか」に関する言説の新史料『滑稽太平記』と、(2)17世紀の胡弓描画にみられる「半球型」胴の二点について、共同研究の成果と今後の課題などを述べたものであった。(1)では配布プリントに原文が示されたが、それによれば「三味線は蛇皮、小弓はらべいかといへり」等とする言説は、前後の文章の文脈から離れた挿話的なものであったことがよく分かる。この特異な伝承の流通の背景はたしかに興味深く今後の解明が待たれる。(2)では17世紀までの描画例は現状では約40数点で多くはないが、その中で丸形（半球形を含む）は約12点で比率が高いことが指摘され、配布プリントに図像が12例提示された。発表後の質疑にもあったが、丸形から三味線胴への変化の要因や時期が大きな問題となってくるが、これについては未だ共同研究としての統一見解はないが、今後17世紀のアジアの楽器の中で考えていきたいとのことであった。　遠藤徹

◇研究発表１B（司会：田中多佳子）

北インドにおけるハルモニウムの受容　岡田恵美

岡田氏は、ハルモニウムがインドにもたらされて、改良が加えられ、受け入れられていく過程を、楽器の「グローカル化」過程として跡付けた。1960 年代にフランスで量産されるようになった足踏み式ハルモニウムは、在留外国人等によってインドにもたらされた。19 世紀終わりには、外付けのふいごをもち鍵盤が小型化された国産ハルモニウムが発明され、携帯可能で床に置いて演奏できる安価なハルモニウムが広がる。声域に合わせ、ストップの選択により手軽に移調が可能なハルモニウムは、古典声楽の伴奏楽器として用いられるようになり、20 世紀初頭に設立が相次いだ音楽学校でも採用されていく。一方、マドラス会議（1927 年）において不採用となり、1939 年には国営ラジオ放送における使用禁止が決定されるなど、古典音楽界では反対も大きかった。その理由の一端は、鍵盤楽器では、微分音や音高が連続的に変化する装飾音を出せないというところにあった。それにもかかわらず、ハルモニウムの使用は広がり、他の楽器の技法を応用して新たな奏法を開拓したり、楽器に改良を加えて音高の連続的な変化を可能にしたりする工夫も行われている。

ハルモニウムがインドに根付く過程を詳細に描いたことは、岡田氏の研究の大きな貢献である。インドネシアにおいても、1930 年代にはハルモニウム・オーケストラが、ラジオ放送に登場したことが確認できる。ハルモニウムのグローカル化は、インド一国だけの出来事に終わらないということが、まさにグローバル化とローカル化の過程が複雑にからみあっていることを示している。岡田氏は、主に、楽器の改良工夫という即物的な側面をグローカル化という概念でとらえたが、単なるローカル化を越えた大きな動きを同時に押さえることで、「グローカル化」という概念が一層生きるのではないか。この研究がさらに発展することを期待したい。　福岡正太

古典アラブ音楽における核音とテトラコードの機能：アレッポの伝統歌謡の事例およびマカーム理論先行研究の再検討　飯野りさ

飯野氏は、アレッポの伝統歌謡を事例として取り上げ、先行研究を批判しつつ、アラブ古典音楽におけるマカームを決定する要素としてテトラコード（ジンス）と核音（ドミナント）が重要であることを論じた。カイロを中心として発展してきた音楽理論によると、マカームは、構成音と終始音によって定義される。しかし、アレッポの古典音楽においては、旋律を突き動かす「エンジン」の役割を果たすドミナントがマカームを判断する上で重要であるという。彼女は、各ジンスの最低音と最高音を核音と見なし、当該マカームでもっとも主要な核音を主核音＝ドミナントとし、主核音を含むテトラコードを個性ジンスと呼んだ。音階構成音が同じでも、ドミナントと個性ジンスの違いが、

それぞれのマカームの「色」や「情緒感」を生み出している。また、ジンスと核音の概念を用いてウンム・クルスームによる『廃墟』を分析すると、歌唱部分では、核音を軸として異なるジンスへと移行していく様を分析することができる。異なる「色合い」をもつジンスを結びつけていくことは、「音のアラベスク的世界」（水野信男）の実現とみることができるという。彼女の議論は明快であり、マカーム分類の議論を進めるのに大きく貢献するだろう。ただし、時間の都合もあり、ジンスをテトラコード概念でとらえることや核音の概念を導入することについては十分な議論がなく、私にはその妥当性を判断できなかった。また、マカームをとらえる理論の「正しさ」と同時に、それらが占める社会的位置とそれが実践に及ぼす影響力について民族誌的にとらえていくことも必要ではないかと感じられた。

福岡正太

スンダの音楽に見られる「二重音階性」　佐々木真理子

佐々木氏は、西ジャワをふるさととし、スンダ語を母語とするスンダ人の伝統音楽にみられる「二重音階性」について論じた。彼女は、伴奏楽器と、歌およびそれをリードするルバブ等の旋律が異なる音階を使用することを、二重音階性という用語で示した。スンダ語における二重音階性にあたる用語あるいは概念の有無については触れられなかったが、私の知る限りでは存在しないと思われる。発表では、まず、ペロッグ、ソロッグ、サレンドロという３つの音階について、実例を交えて紹介した後、ガムラン・サレンドロ（サレンドロ音階のガムラン）を例にとり、サレンドロ音階のガムランに対して、いかにして歌とルバッブによるソロッグ音階のメロディがのせられるかを、いくつかのパターンに分けて例示した。サレンドロ音階は、彼女によれば、下行形で示すとＡＧ↓Ｅ↑ＤＢ↑にほぼ相当し、スンダ式の数字記譜法では、それぞれ１２３４５と示される。それに対し、ソロッグ音階は、日本の都節音階とほぼ同じものである。ある曲において、例えば１，２，４の音が重要である場合、これらの音を両音階に共有の音として、サレンドロ音階の３と５の音を下げることでソロッグ音階を生成することができる。同様に１，３，４が重要な音である場合は５と２の音を、１，３，５が重要な音である場合は、４と２の音を下げる。佐々木氏は、これをもとにソロッグ音階がサレンドロ音階から派生した可能性についても言及した。しかし、これを論証することはかなり難しいだろう。二重音階性は、スンダ音楽の特徴の１つをなしており、それを提示した意味は大きいが、今後は先行研究を参照し、分析のための概念と枠組みについて学術的な議論を行える形でかためていくことが必要だろう。

福岡正太

◇研究発表２Ａ（司会：遠藤徹）

『諸経要文伽陀集』における節博士上の朱点とその解釈をめぐって　近藤静乃

その源を天台大原流の祖良忍に遡り、藤原師長に始まる妙音院流の譜本『諸経要文伽陀集』は『金沢文庫資料全書』第７巻（1984）にその影印がある。近藤氏はこれに依拠して『東洋音楽研究 74』（2009）に「伽陀の句型とその旋律構造－称名寺蔵神奈川県立金沢文庫保管『諸経要文伽陀集』の分析による」を発表されているが、発表後に原本の節博士上に朱点を見出した。本発表は、その朱点の傍らにある補助記号「刀」または「カ」が「切」を意味し、朱点が「節を区切る記号」つまりブレス記号であることを明かしたものである。さらにこの朱点が加えられたのは、時代が下がるにつれ装飾が増えて伽陀の旋律が長大化し、ブレスの追加が必要となったためであり、またこのことは難題だった音価やテンポの解明にも繋がることを示唆した。

複数の僧侶が唱和する声明では詞章の１字中でのブレスの箇所や、次の字に移る際のブレスの有無を明記することは重要であり、その情報を省略された用語や小丸などの記号により朱入れをすることはよく行われてきた。また博士上に添えられる用語の漢字の多くは部首を省略して記すことからも、本発表での見解は頷首できる。天台の『六巻帖』の博士との比較によりブレスの増加を示す説明も明快で、論点を絞り込んだ本発表は非常にわかりやすいものであった。

旋律面が重視され、その音価やテンポについて論じられることが少なかった声明研究において、これまで雅楽と声明との関わりから研究を進められてきた近藤氏の今後の研究が多いに期待される。

澤田篤子

『玉堂琴譜』に見られる『三五要録』『仁智要録』の解釈　鳥谷部輝彦

『玉堂琴譜』（寛政３刊）は、平安時代に行われた催馬楽の楽曲を琴楽化したものの楽譜が中心となっていて、そのことから著者の浦上玉堂（延享２～文政３）は音楽事典に「催馬楽研究家」と書かれるほどである。鳥谷部氏は、依拠したと玉堂みずからいう『三五要録』『仁智要録』の催馬楽と『玉堂琴譜』のそれとをぐたい的に比較対照し、そこから得られた所見を述べた。じっさいの比較までの準備は、じゅうぶんに行われたと思う。

比較は「旋律構造」（音高）と「時間構造」（音値）の両面から行い、音高面では変声の主声への集約による五声化を、音値面では笏拍子の記号を均等な音値とするなど６通りの処置を、それぞれ玉堂は施した、つまりは「編曲」であったというのが結論であった。

昨年度の大会や６月の東日本支部例会での氏の研究発表題目からは、琴楽への関心は、想像できない。おそらく比較的短時日のうちに発表内容をまとめられたであろうことに敬意を表し、さらなる発展を期待する。ただ、「今後の課題」として、楽譜史料に関することを強調されたが、玉堂の行動全体の中で捉えるという視点も忘れないでほしいと思う。

付けくわえるならば、文献用語に１、２の疑問があった。また、もっとも中心のところで理解できない部分が残ったのは、催馬楽や琴楽に対する報告者の勉強不足が原因ではあるが、発表がもうすこし円滑で明晰な口調であったら、という率直な感想も持った。　蒲生郷昭

『吉原細見』の名寄せに見える常磐津節の男芸者について　前原恵美

前原氏の発表は、『吉原細見』の「名寄せ」に記された男芸者の名前に着目し、常磐津節、富本節、清元節の芸姓をもつ男芸者の動向を、明和６年から明治３年までを対象に調査した結果報告であった。①芸者数の推移から３流の勢力変化が読み取れること、②同一人物が他流派の芸姓に改名している場合があり、２種類の芸姓を交互に名乗っている例もあったこと、③芝居出勤と同時期に吉原芸者としても活動している者がいたこと、という３点が報告され、『吉原細見』は、芝居の出勤記録など他の資料と細かく照合する必要はあるが、芝居に出演している演奏家の劇場外での音楽活動を知ることができる資料であると結論づけた。

①の芸者数の変遷は、約100年間の３流の状勢がわかる興味深いデータであった。今回は各流派内での人数の増減を中心とした説明だったが、３流間の関係から論じると同じデータでまた違う説明が可能ではないかという印象を受けた。発表で言及されなかった人数変化に関してフロアから質問があったが、それに対して吉原外での出来事で変化の理由を説明できそうな所を優先的に取り上げているとの回答があり、今回のデータが発表者の今後の研究の基礎資料として作成されたことが理解できた。②や③は豊後系浄瑠璃演奏家の江戸時代の活動に関する新しい情報であり、フロアからは、当時の音楽活動の実態を明らかにする方向でさらに研究を展開させてほしいという期待の声が出された。　小塩さとみ

◇研究発表２B（司会：尾高暁子）

チベット族わらべうたの音楽構造：中国チベット自治区山南地区カラ郷のわらべうたを例に　内堀明子

昨年、チベット・カラ郷のわらべうたのジャンルについて、フィールドワークに基づく調査報告をおこなった内堀氏は、さらに分析・考察を進め、言葉や動作と旋律の関係に焦点をあてながら、カラ郷のわらべうたの音楽構造を論じた。蒐集資料の分析結果を綺麗にまとめてあり、小泉文夫のわらべうたの研究にも倣って、音階、リズムと拍子、旋律の型や特徴、楽式といった諸要素をわかりやすく整理して示していたことを、まずは評価したい。が、分析方法とその中での判断基準、とくに考察のポイントであった「声調と音楽（旋律）の関係」そして「遊びの動作と音楽の関係」については、フロアからも質問があがった。「声調と旋律（の音高の動き）は本当に合致しているか？」（西日本・石井）、「おおよそ一致しているが、１音節内でも音高が微妙に変化する声調を五線譜に書き表すのは難しく、楽譜には骨格のみを示している」、「先ず歌(旋律)があり、それに言葉（チベット語）をつけたのか？それとも逆か？」、「漢民族の文化の影響はもちろんあり、元は漢語の歌もあるだろう。逆に伝統的な歌に漢語をあてはめたケースもある」（報告者による要約、以下同様）――こうした質疑から、声調と旋律のどのような点が、どのような場合に、どのように一致していると言えるか・言えないかを、歌の出自も視野に入れながら、明らかにしてみせることが必要であり、次の課題がみえたのではないかと思う。もっとも、それも内堀氏の研究の目的次第かもしれない。採譜に関して、調号を付けることの是非を問う質問（西日本・岩井）があったが、内堀氏の答えでは北京の音楽院へ修士論文を提出する際、中国の音階理論と矛盾しない形で記譜するよう指導があったという。研究の目的は、そのまま研究のスタンスや方法とも関わるため、実は１番重要な問題になってくる。内堀氏の研究成果は中国の音楽学にも資するものであるだけに、良い形で継続できることを願う。　金光真理子

歌掛けの旋律における定型性と声調の影響　梶丸岳

声調と旋律の関係に焦点を当てた梶丸氏の発表は、前発表でこの問題に興味をそそられたフロアにとっては時宜に叶うものであった。中国貴州省のプイ族による歌掛けの歌を対象とし、その旋律の形成を「声調」と「定型」のふたつの観点から明らかにするという研究の主旨はわかりやすく、また分析に五線譜による採譜と並行して音楽編集

ソフト（Melodyne3.0）の活用も試みるなど、音高が揺れ動く歌の旋律をできる限り実証的に分析しようとする姿勢は、歌の分析に特有の問題を真摯に検討するもので、興味深く聴いた。分析結果に基づく結論も明快で、第１にプイ歌の旋律と声調はおおよそ一致している、第２にプイ歌の旋律はおおよそ定型的である、そしてプイ歌では歌詞の文節数を柔軟に増やせるよう（「歌詞の不定型性」）、旋律の定型性も緩やかになっているのではないかという推論が加えられた。この結論とそこへ至るまでの分析方法には質問の手が上がった。第１の旋律と声調の関係については、「（採譜された）音が音階の構成音（旋律の骨格）か、それともポルタメントのような経過音か、その書き方によって見え方も異なるのでは？」（東日本・谷口）、「旋律の音と音の間の動き方と声調の関係は？」（東日本・ギラン）といった質問が出た。採譜の問題ないし限界を認めつつ、梶丸氏は今回の試みが歌詞の音節上の音の動きを３パターン（上昇／下降／平行）に分け、声調と旋律とで見極めることにあったと説明した。第２の旋律の定型については、「旋律が定型であっても歌詞の表現をかなり自由にできるケース（奄美）もあるので、結論は一般化できないのでは？」（東日本・酒井）といった質問が出た。梶丸氏は中国の事例に沿った結論であり、声調（による音高の変化）が言葉の意味と不可分に結びついている中国語の場合、歌詞が旋律へ与える規制が強いことを指摘した。さらなる研究成果が楽しみである。　　金光真理子

沖縄本島北部の女エイサーの音楽　　小林幸男・小林公江

沖縄の大会で沖縄の音楽文化についての発表を聴くのは格別の思いがする。小林両氏の発表は、女性によるエイサー（女エイサー）をめぐって、歌の歌詞の特徴を幸男氏が、踊りの特徴を公江氏がそれぞれ説明し、それらの特徴から明らかになる女エイサーの「固有の性格」を指摘した上で、エイサーという芸能をひとくくりにみるのではなく、その中のさまざまなジャンルを個別に検討する必要性を訴えるものであった。エイサーに関しては浅学な報告者が理解した限りでは、女エイサーの歌詞の特徴は男性へのアピールという点にあり、また踊りの特徴は「ゆっくりした曲」より「早間の曲」の方が基本的な要素（歌の部分では歩き／小走り、囃し詞の部分では踊る）を多く残していること、また大宜味村側よりも国頭村側の方が上述の基本形をより多く残していることにあるという。とくに踊りについては、映像資料を手際よく紹介しながらの説明であったが、それだけにもう少し時間の余裕があったらと惜しまれた。

質疑応答では、「女エイサーによる門付けはなかったのか？」（東日本・酒井）、「記録はなく（ただし１か所では真似事があったようである）、聞き取り調査からも確認していない」、「囃し詞が発達しているのは何故か？」（沖縄・飯田）「歌の掛け合いの風習が、地謡（ぢうてー）と踊り手との対等な形として、昔のタイプの歌には残っているのでないか」、「臼太鼓（うしでーく）と女エイサーの違いは？」（沖縄・比嘉）「違いは大きい。まず臼太鼓では歌い手と踊り手とが分かれていない（女エイサーでは分かれている）。歌も異なり、臼太鼓の歌は琉球古典音楽と同じである（女エイサーの歌はざれ歌的）。また、最後のちらしの曲種も異なる」――など他にも活発なやりとりがなされた。長年の研究から得た蒐集資料と知見に基づく興味深い発表であった。　　金光真理子

◇研究発表２C（司会：久万田晋）

本セッションは、明治後期の沖縄、大正後期の朝鮮、大正前期の徳島、という近代日本３地域での音楽活動に焦点を当てた発表であった。

「琉球音楽」の用語の出現と定着
―近代沖縄の新聞資料を中心に―　　三島わかな

明治 22 年から明治 45 年までの新聞、雑誌、図書に見る記事 27 の事例をＡ３資料両面刷り１枚と映像を使って説明しながら、現今の「琉球音楽」の用語が、当時どのような用語で表現されていたかを考察した。用語「琉球音楽」の紙上での初出は『琉球新報』明治 37 年２月 19 日で、オルガン・琉球音楽・薩摩琵琶・浄瑠璃のごとく洋楽や日本本土音楽と区別するために使われた。それ以前は、沖縄外部では琉球浄瑠璃・楽・琉球踊狂言・琉球国の小歌など日本の伝統芸能や伝統音楽のジャンル名を代用しており、沖縄側では沖縄三味線・沖縄手躍・弾弦唱歌・歌曲三弦など、楽器名や演奏様式を示すことで琉球音楽を意味した。くだって明治 40 年以後「琉球音楽」の用語が確立し、明治末期には琉歌・琉楽のような短縮用語が使われるほどとなった。なお教育界では「沖縄音楽」、民謡については「沖縄民謡」などの用語が散見する。用語の変遷を辿ると、琉球文化に対する自意識を目覚めさせた背景を読みとることができる、と結論づけた。

議場からの「沖縄音楽の用語はなぜ淘汰されたか」の質問に対して「琉球国に由来する音楽という意識から、琉球音楽という呼称となった」と答え、「沖縄の知識人の間に、民間の音楽と琉球音楽について価値観の違いがあったか

否か」の質問に対しては「明治 40 年頃から両者のあいだに価値観の違いが確立していった」と応じた。司会者から、教育界の「沖縄音楽」の用語について、「琉球」と言う用語を排除する考え方がなかったかどうか。政治上の統治者の交代によって琉球・沖縄の呼称が時代により変る。沖縄を統治するという観点から、用語に関する規制があったことを考慮に入れてもらいたい、との教示があった。

蒲生美津子

李王職雅楽部の日本公演（1924 年）が意味するもの
―「都をどり」との関わりから―　山本華子

都をどりにおける「中挿み」曲として朝鮮歌曲や舞曲を配することを計画して、祇園歌舞会が 1923 年 7 月に朝鮮を視察、翌 24 年 1 月 17～23 日に李王職雅楽部が日本公演を行い朝鮮舞曲を伝授、同年 4 月の第 56 回都をどり公演では朝鮮舞曲のアレンジを中挿みに組み入れた経緯について、A４資料３枚と画像を用いて発表。先行研究の廣井榮子「伝統の都の近代：博覧会の音楽芸能がはらんでいるもの」『音楽学とグローバリゼーション』（93－97 頁、日本音楽学会、2004 年）を、朝鮮側の資料から検証し、一連の公演内容とその意図を考察した。李王家雅楽部の訪日を、朝鮮側では昭和皇太子結婚祝賀のためとし、日本側では日韓併合 15 周年記念と目したが、その真意は如何なるものか。『朝鮮』『東亜日報』『京城日報』、蔵書閣所蔵のマイクロフィルム「李王職の報告文書」を活用して、来日時の動向、来日楽師 12 名の氏名、18,19 日の公演演目名、18 日の演目《萬波停息之曲》の音源資料（1928 年録音のビクター版 SP レコード）、都をどり「浮宝春の賑」に挿入された朝鮮系３演目名を提示しながら説明した。

議場から、せっかく計画した大正 13 年の都をどりは観客が不入りで、在日朝鮮人を招いて客席を満たすほどだった、その理由について質問があった。発表者は、音楽舞踊のレベルが低かったことを理由としたが、質問者は、当時の日本側の朝鮮文化に対する理解度や朝鮮人に対する偏見などについて検討する余地があることを指摘した。また 1929 年京城の始政 20 年記念朝鮮博覧会で朝鮮十景という総踊が上演され関連性が興味深いとのコメント、及び舞曲の作詞者・歌詞内容・題材となった景勝地の選ばれた基準について応答があった。

蒲生美津子

四国３収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動①
徳島俘虜収容所　岩井正浩

要旨にある松山・丸亀・徳島の３収容所のうち、徳島収容所に限定して、A３配布資料１枚を用いて発表。1915年４月５日～1916年９月17日発行の徳島収容所新聞『Tokushima Anzeiger 徳島新報』から記事６件及び第九初演の1918年６月１日の第50回演奏会プログラムを引用しながら、それらから読み取られるドイツ人の音楽活動と徳島市民の日常を紹介し考察した。彼らが耳した船や汽車の汽笛・犬の鳴き声など生活の音、三味線のペンペン鳴る音・鼓の音、人形芝居、阿波踊り、花火、正月行事などの異文化について、彼らが如何なる美的判断をしたかを説明。音楽活動については、大掛かりな編成（だがファゴットはオルガンで代用）を有し、第九合唱は４パートを男声のみで演奏した。徳島市民は垣根越しに彼らの演奏を聞き、市民との触れ合いも多くあった。

議場からの質疑を要約すると、俘虜たちはごく一般の市民出身者で、特別な音楽家ではない。音楽は教養として身に着いたもので、趣味として音楽を楽しんでいたことが想像される。楽器は携えて来日。後日は鈴木ヴァイオリンなど日本製を使った形跡がある。演奏会プログラムは大量に残っているが、楽譜は残存しない。演奏曲目のなかに、名の知られない作曲家名が多く見受けるが調査中である、との解答があった。

蒲生美津子

◇研究発表３A（司会：福岡正太）

ディアスポラとしての在日コリアンの音楽と多文化共生
―京都・東九条マダンの演目「和太鼓＆サムルノリ」にみるハイブリディティー　磯田三津子

今回の発表は京都市南区東九条で行われている「東九条マダン」という祭りにおける音楽演目を通して、在日コリアン、日本人そして障害を持つ人々が作り出すハイブリッドな多文化共生についての研究である。いくつかの音楽演目の中で、発表者は第16回(2008年)における大プンムル、サムルノリ、和太鼓＆サムルノリ（ワダサム）、地域のブラスバンドなどから、ワダサムが和太鼓とサムルノリのフュージョンであることに注目し、ワダサムの演奏者が、「ワダサムで表現することは何か、なぜか、なぜワダサムで音楽づくりを続けるのか」について検討している。この結果はワダサムの物語に基づいた音楽づくりが、その過程において特に和太鼓演奏者がその実践の中に巻き込まれ、朝鮮半島の音楽を学び、ワダサムで演奏する意識を高めていること、ワダサムは在日コリアンが共有し共感できる経験が表現されている音楽であり、多文化共生に向う取り

組みでもあると結論付けている。

大阪の一部の小学校でも、在日の子ども達によるチャンゴクラブと日本の子どもの和太鼓クラブが同じ校内で活動している事例もあり、多文化共生が自然な形で醸成されていく必要性・可能性は重要な視点である。ただ、多文化共生を「目的」として活動すると、音楽の本来の価値が二次的になる危険性も生じかねない。質問者から３拍子が和太鼓演奏者になじんでいないという指摘に見られるように、何が違い何が共通するのかということを音楽学的に分析していけば、更なる展開が期待される。　　岩井正浩

故郷を離れた民俗芸能の実践
―ハワイ・マウイ島の事例から―　　遠藤美奈

本発表は、ハワイ・マウイ島で近年新たに加わった沖縄の民俗芸能の実践に注目し、沖縄県系３世らが何を目的として芸能を継承しようとしているのかについての意義と方向性についての研究である。マウイ島パイアの臨済禅の寺ではここ長年、盆踊りのレパートリーはすべて沖縄の曲で行われ、その演者はこの寺を中心に結成された「マウイ琉球文化グループ」である。このグループは積極的にお盆以外でも沖縄の芸能を実践してきており、今回はその中で盆に関係ないウスデークと獅子舞についてである。

彼らは沖縄のウスデークの旋律が複雑なため、自らの土地に相応した歌詞を琉球語→英語→日本語→島言葉に、旋律を３音の上行・下行というシンプルなものにすることであった。

獅子舞は、RinzaiZen の寺の盆行事に登場し、「獅子起こし」という儀礼を設け、祝詞が捧げられた。ただ、彼らは沖縄との結びつきを意識しつつも、現在の沖縄の芸能を共に共有しようとする意識とは異なっている。

本発表は、数多くの沖縄系アメリカ人のコミュニテイが、アイデンティティを確認し維持しているかについての興味深い研究である。ただ、フロアーからの質問に見られた「獅子起こし」などに神事がどのように位置づけられているか、単なる芸能となっているのか、また琉球音楽に代表されるようにどれか古典でどれか民謡かなど、深層に潜むアイデンティティへのアプローチが進展すると更なる成果へと展開すると思われる。　　岩井正浩

ハワイと日本の「岩国音頭」
―移民文化とそのルーツの変容をめぐって―早稲田みな子

日系アメリカ人は日本文化を様々な形で享受・表現する活動を続けてきている。それらは盆踊りを始め和太鼓など、身体表現や音楽などの分野でも活発に行われてきている。本発表はそれらの中で最も古いとされる山口県の「岩国音頭」に焦点をあて、日本とハワイの現状比較にとどまらず変遷の違いにも注目したもので、具体的にはレパートリー、演奏のコンテクストと形態、そして伝承方法についての比較である。

岩国とハワイはさまざまな要件が働き「岩国音頭」が踊られてきたが、レコード民謡の普及、若者の嗜好の変化に見られる近代化・西洋化などは岩国との共通の変化要因をもたらして来ている。そして移民文化＝移植され変容した独特の文化 v.s. ルーツの文化＝伝統、権威という２項対立の視点は時代錯誤であるといえると結論付けている。

フロアからのいくつかの質問に対し、「変化は英語世代になって変わってきている。日本文化に興味がある人が参加してきている」、「支えているコミュニティは岩国中心」という回答がなされた。欲を言えば最後に提示された立石地区における「岩国音頭」がなぜ１曲のみ、深夜まで行われるかについての考察が欲しかった。移民が新しい文化環境の中で、ルーツの音楽・踊りをどのように変容させていったかについては、意図的・無意図的、さらには必然性の有無についても興味がつきない。レジュメとして詳細な資料が配布された発表であり、今後グローバル化の中でさらなる切り口を設定した研究が深化することを期待したい。

岩井正浩

明治時代から昭和前期における謡の習得プロセス
―外地／内地での個人体験を事例に―　　仲万美子

日本が中国大陸をはじめアジア諸国に進出し、日本文化を習得・表現するばかりではなく、現地の方々に提供していったことは、教育をはじめさまざまな分野で行われてきた。

本発表は軍医・勤務医・船医として中国で医療活動にあたられた稲次薫章（のぶあき）が、宝生流の謡をいかにして学んでいったかについて、明治 42 年から昭和 39 年までの日記に記載された謡曲名を抽出整理し、当時の稽古のプロセス、近代日本における外地での能の普及の様子を明確にし、個人と「宝生流」という組織との関係についてである。

フロアからの質問に対しては、「大連に能楽堂が作られたのは森川荘吉が経済界に通じていたこと、昭和 10 年に満州国が立ち上がった後なので、国威効用が重なったのではないか」、また「外地での教習、外地で学んだことが内地

と違うことを引き起こしたかどうかは、戦後どれくらいの方が引き上げられて立ち上げていったかで今後の課題」、さらに「大連に何パーセントの日本人がやっていたかは未だ把握されていない。新聞記事などをローラー作戦で明らかにしていく」という回答がなされた。

外地における日本人が日本の伝統芸能を如何にして習得したかという研究は、国内で発行された雑誌などに依拠せざるを得ないが、本研究は日記を第一次資料として採用していることが特徴としてある。ただ、本題に入るまでの前置きが長すぎて本論が消化しきれないきらいがあった。

岩井正浩

◇研究発表３B（司会：奥山けい子）

英語能の研究―謡と囃子の音楽的特色―　　安納真理子

安納氏は英語能（英語で書かれた 1970 年以来の新作能）を、(1)Noh-influenced (2)Noh-inspired (3)Noh-referenced の３つに分類する。発表では、(1)「能に影響を受けた作品で、能の古典的技法を取り入れているもの」に該当する、リチャード・エマート作〈At the Hawk's Well (鷹の井)〉とデビット・クランドル作〈Crazy Jane (ジェーン物狂い)〉の２作品に焦点があてられ、古典能との音楽の比較や、作者へのインタビューにもとづく分析結果が示された。

質疑では、高桑いづみ氏から、同じくイェーツのテキストを題材とする横道萬里雄作《鷹の泉》《鷹姫》とエマート氏の作品との違いが問われた。これは安納氏の修論で扱われたテーマで、エマート氏は横道作品から技法など様々な影響を受けているが、日本語ではなく英語の歌詞を能の旋律にした点が新たな試みであると述べた。また、金光真理子氏より問われたアメリカでの上演状況については、主にシアター能楽が中心的役割を担っており、オペラ鑑賞のような娯楽的な目的だけでなく、学生向けに英語能を通して日本文化を紹介するという目的でも上演されており、いずれも好評であるという。報告者が英語能作者の創作のポリシーについて質問したのに対し、エマート氏の「テキストが音楽をコントロールする」という考えや、より「日本的である」ことに価値を置く例などが示された。さて、安納氏ご自身はどのような英語能に美的価値を見出し、めざすべき理想の様式や将来的に創作活動に関わるといった具体的な構想はお持ちだろうか。状況を見守る「観察者」に留まらず、日本文化を母胎とした新たな芸術分野を育む担い手として、あと一歩踏み込んだ積極的なアプローチを期待している。

近藤静乃

明治から昭和初期の謡におけるヨワ吟の装飾法と個人様式

丹羽幸江

本発表は、明治から昭和初期における観世流の謡の装飾音に着目し、SP レコードの録音を伝書や謡本の記載と対照して、「現在との雰囲気の違いを、装飾法の違いとして説明を試みる」ものであった。高桑いづみ氏より以下の指摘があった。１．伝書『門謡記』は一般に流通しておらず、また比較した『唱曲弁疑』と 100 年もの隔たりがあるのに、「色どり」を同義に解釈してよいか。２．録音のサンプルが少なすぎる。３．23 世観世清廉と梅若万三郎を同世代として比較していたが、録音は前者が明治 38 年、後者が昭和３年で、30 年もの隔たりがある。４．サンプルでは、丹羽氏と違うところにイロがあるように聞こえた。地拍子との関連で、音が伸びる可能性がある箇所に装飾が付くなど、総合的に判断すべきである。５．謡本の大成版は素人向けで、プロは必ずしもこのとおりに唱えない。

丹羽氏によると、発表で用いたもの以外にも多くの資料を確認しておられるようだが、配布資料を見る限りではそれがあまり反映されておらず、分析結果もやや信憑性に欠けるように思われた。録音資料を人間の耳で聴取する場合、多分に分析者の主観が入ることに留意せねばならないし、より客観的な結果を導き出せるような分析方法を模索する必要がある。そもそも比較対照すべき伝書や謡本はこれでよいか。伝存する資料はこれ以外にはないのか。分析に使用された装飾音の模式図は能の謡とは異なる文脈で使用されたものであり、これを安易に援用することに問題はないか…など、断片的であるが数々の疑問が残った。分析の前提として、まずは論拠とする基礎的な資料を精査する必要があると思う。

近藤静乃

黒川能における芸の習得過程　　柴田真希

本研究は、黒川能の主要な舞台「王祇祭」に焦点をあて、現地での参与観察をつうじて、芸の習得過程を短期的（祭前１ヶ月の稽古）と長期的（役者人生における芸の習得）という２つの視点から考察したものである。

質疑では、「習得過程はある程度遵守されるべき規範が存在しながらも、時々の変容に柔軟に応じながら再構成されている」点について、親族の不幸（個人的事情）や出稼ぎ（社会的事情）による影響などが挙げられ、金光真理子氏より、個人的・社会的・時代的な事情を関連づけて考察した方が面白いのではないかとのご意見があった。また小島美子氏は、芸の教授を１対１ではなく、複数の集落の指導者による「合わせ」をすることで黒川全体の伝承

がうまく機能している、と述べられた。柴田氏は、「合わせ」が歴史的にどの程度遡れるのか定かではないが、芸の継承者の減少もあって、近年は黒川全体として芸態の方向付けをする動きが見られるという。

丁寧な参与観察にもとづく明快なご発表であったが、報告者が気になったのは、黒川能の芸の習得過程を「役者人生」と表現し、五流の能役者のごとく芸を特化して考察している点である。「当事者たちの文脈では、役者としての芸の習得よりも、王祇祭の滞りない実施の方が優先される」と柴田氏自身も述べているように、「役者」となることが最終目的ではなく、大事なのは神事としての祭の主旨―黒川に根ざした民俗的信仰―にあり、芸能はその具現化の過程で生まれた副次的存在であると思う。「当時者の文脈に沿って」という方針ならば、個々の演目が存在する本質的な意味――例えば、なぜ幼い男児が「大地踏」の役を担うのか、といった背景を視野に入れて、芸の習得過程をライフサイクルのなかに位置づけるべきではなかろうか。

近藤静乃

日本音階論の混乱に対する統一的見解
―邦楽における調性原理―　　**宮内基弥**

この標題を見て、報告者は個人的に中世の天台声明における論争を想起したが、声明に限らず、日本の音階論には歴史的に様々な論争が存在する。宮内氏のいう「混乱」とは、小泉文夫氏とその周辺におけるもので、小泉理論のなかで現行の近世邦楽において矛盾が生じる点を批判する内容であった。質疑では、主音という概念がそもそも不必要ではないかというコメントや、「小泉理論を正しく理解していない」という厳しい批判が起こり、フロアは騒然となった。

小泉氏の理論化のプロセスを見ると、日本音階論の歴史的展開を認めつつ、さらに共時的にも幅広く理論化の方法を求めて、多様な音楽に対応可能な枠組みを作ったのであり、そこが特定の対象を理解するために音階を固定的に捉えた宮内理論との決定的な違いではなかろうか。当日はご自身の主張がうまく伝わらず不本意に終わったものと拝察するが、それならば「統一的見解」といった大風呂敷は広げずに、範囲を限定して論じたほうが誤解を避けられたのではないか。また、宮内氏の提唱する「桃山音階」は、雅楽や声明から見れば「律」（羽位が嬰羽にある場合の五音音階）にあたる。専門用語の造語は研究者の自由であるが、言葉のもつ概念が論証しようとする理論に多分に影響を及ぼすことを考慮すべきである。宮内氏自身もそれに気づいているが、「桃山」という特定の時代を想起するような用語を、音階の歴史的背景をふまえることなく安易に適用するのはそれこそ「混乱」を招く恐れがあり、避けた方が無難であろう（「五音（宮商角徴羽）」の解釈も然り）。研究の熱意は大いに認めるが、やはり根本的な問題として、論の立脚点を慎重に見直す必要性を感じる。　　近藤静乃

ICTM（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ

１．ICTM 東アジア音楽研究会第２回研究会開催について

ICTM 東アジア音楽研究会（MEA）は、第２回研究会を 2010 年８月 24～26 日（火・水・木曜日）に、韓国、ソウルの the Academy of Korean Studies で開催します。2006 年に正式に発足した MEA は、第１回研究会を 2007 年 12 月に中国の上海音楽院にて行いました。2010 年以降、MEA は ICTM の世界大会が行われない偶数年度に研究会を催す予定です。

第２回研究会のプログラム委員長はChinese University of Hong Kong のTsai Tsanhuang（thtsai@cuhk.edu.hk）、大会実行委員長は、the Academy of Korean Studies の Sheen Dae-Cheol（sheenone@aks.ac.kr）（敬称略）です。発表申込はすでに締め切られていますが、オブザーバーとしての参加は、ICTMの会員でなくとも可能です。是非ふるってご参加ください。

大会テーマ

１．Intangible Cultural Heritage in East Asia: History and Practical Results
２．Recordings and Films or The Potential and Pitfalls of Audio-Visual Technology and Materials
３．Reconsidering Sacred and Profane in East Asian Ritual Music
４．Asian Music in Music Textbooks for Primary and Secondary Schools in East Asia
５．Asian Soundscapes and Cyberspace
６．New Research

第２回研究会の詳細については、MEA ウェブサイト (http://homepage.ntu.edu.tw/~gim/mea/conference.htm) をご覧ください。

<u>発表申込をされた方へ</u>

発表を行うにあたっては ICTM の会員であることが条件です。非会員で発表申込が受理された方は、ICTM への

入会手続きを行ってください。
(入会についての詳細はhttp://www.ictmusic.org/ICTM/info.php をご覧ください)。

MEA 理事会メンバーについて

現在MEA理事会は、会長Yingfen Wang (台湾)、副会長Larry Witzleben（アメリカ合衆国)、事務総長早稲田みな子（日本)、通常理事Sheen Dae-Cheol（韓国)、Xiao Mei（中国)、そしてUm Hae-kyung（英国）によって構成されています。通常理事の３名は2010年の第２回研究会をもって任期満了となります。選挙により新たに４名の通常理事が選出され、結果は韓国の研究会で発表されます。

選挙の詳細はMEAウェブサイトにいずれ掲載される予定です。

２．第 41 回 ICTM 世界大会開催について

次回の ICTM 世界大会は、2011 年、カナダのニューファンドランド島 (Newfoundland) のメモリアル大学（Memorial University）で、7 月 13～19 日に行われます。

大会テーマ

１．Indigenous Modernity
２．Cross-cultural Approaches to the Study of the Voice
３．Rethinking Ethnomusicology through the Gaze of Movement
４．Atlantic Roots/Routes
５．Dialogical Knowledge Production and Representation: Implications and Ethics
６．Acoustic Ecology
７．New Research

発表申込締切：2010 年９月７日

当地は、Festival 500 という国際的な合唱の祭典の開催地で、2011 年は、ICTM 世界大会に先立つ７月３～10 日に行われることになっています。本大会の詳細は、http://www.mun.ca/ictm をご覧ください。

3. ICTM 担当委員からのお願い

１）一斉メールについて

東洋音楽学会員の皆様のうちICTM会員に対して、ICTM担当委員より不定期にICTMに関連するお知らせを一斉メールで送信しています。しかし、アドレスが無効になっているなどで戻ってきてしまうケースがいくつかあります。一番最近の会員向け一斉メールは2009年９月２日に送信しました。このメールを受信されなかった方は、今後ICTMに関するメール連絡を希望される場合、お手数ですが、担当委員（早稲田みな子：minako_waseda@msn.com）までご連絡ください。また、現在ICTM会員でない方も、ICTMに関するメール連絡を希望される場合は同様に、ICTM担当委員までお知らせください。

２）ICTM 関連の情報提供について

ICTM 担当委員が MEA のメンバーであるため、MEA に関する情報は会報、機関紙、一斉メール等で皆様に随時お知らせしていますが、他の ICTM 内の研究会については情報薄です。他の研究会に所属している会員の方からの情報を募集します。お寄せいただいた情報を東洋音楽学会員に発信します。ご協力、よろしくお願いいたします。

（ICTM 担当委員：早稲田みな子）

ICTM音楽考古学研究会の報告

ICTM音楽考古学研究会の第３回会合が、2009年９月23～26日にニューヨークで開催された。会場はニューヨーク市立大学（The City University of New York）のThe Graduate Centerで、26日のみメトロポリタン美術館（Metropolitan Museum of Art）に場を移して行なわれた。本会合は「Drawing the Musical Past: Music Iconology, Instrument Making, and Experimental Playing in Music Archaeology」と題され、ニューヨーク市立大学音楽図像学研究センターの第12回研究会との共催である。

予定されていた参加者 33 人のうち 30 人が発表を行なったが、どちらかというと音楽図像学的な内容が多かった。これは音楽図像学研究センターとの共催のためでもあるが、根本的に音楽考古学と音楽図像学の研究領域の曖昧さゆえのものと考えられる。またヨーロッパ、エジプト、西アジアの研究が多く、研究地域に偏りが見受けられた。報告者が関わっている東～東南アジアについては３件の発表があり、中でもモンゴルの楽器に見られる動物図像を伝統音楽からポピュラー音楽に至るまで詳細に観察した研究が、報告者には興味深かった。24 日の夜には復元された箜篌の演奏会が行なわれ、東洋音楽学会会員の増本伎共子氏作曲の「Archaic Phrase for Kugo」が披露された。エジプトの弓形ハープの復元についての発表、また報告者による東～東南アジアの弓形ハープについての発表とリンクされた有意義な実演となった。

会合は ICTM の会員のみならず、ニューヨーク市立大学の学生も聴講して盛況であった。だが１つ残念なことは、最終日のメトロポリタン美術館でのプログラムが開催直前

になって付け加えられたために、帰国便の都合で参加できないメンバー（報告者も含めて）が出たことである。現在閉鎖中の楽器展示室の楽器を特別に収蔵庫で見せてもらえるという貴重な体験ができたはずである。会合をより実り多いものにしようという主催者の意図が結果的に不公平感を生み出すことになってしまった。海外からの参加者が多い研究会の企画･運営のむずかしさを痛感した。最後に、報告者が何よりも驚いたのは、日本からの参加者は今回の報告者が初めてだということである。音楽考古学研究会の代表者 Arnd Adje BOTH 氏の「日本にも少なからぬ数の研究者がいるはずなのに、参加してもらえない」という嘆きのコメントに、思わず目を伏せてしまった次第である。

(由比邦子)

会員の受賞

◇三島わかな氏が第 31 回沖縄文化協会賞を受賞

本学会員の三島わかな氏が沖縄学の研究者を対象とした第 31 回沖縄文化協会賞（金城朝永賞）を受賞されました。「近代沖縄における音楽文化の研究」をはじめとする数々の論考において､学校教育の現場と教育者の活動を中心に､音楽文化のありようを実証的に研究した成果が評価されたものです。授賞式は、11 月 21 日に早稲田大学で開催された沖縄文化学会の総会において行われました。

◇伊東信宏氏が第 31 回サントリー学芸賞を受賞

本学会員の伊東信宏氏が第 31 回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）を受賞されました。対象となった『中東欧音楽の回路―ロマ・クレズマー・20 世紀の前衛』（岩波書店）では、音楽文化のメインストリームとは言い難いロマやクレズマーの音楽を通して、これまでの音楽史像の思考の枠組みや問題系全体を問い直す試みが提示されており、この壮大な企図が評価されたものです。授賞式は、12 月 10 日に東京会館において行われました。

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2009年９月26日（土）に東京学芸大学20周年記念飯島会館において第80回通常理事会が、10月17日（土）には沖縄県立芸術大学第１キャンパス大講堂において第40回通常総会が行われました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。通常総会の議決の詳細については、後掲の第40回通常総会議事録（抄）ならびに添付書類をご参照下さい。

１）新入会員について

理事会において、2009年４月以降に仮承認された16名が正会員として、正式に承認されました。

２）田邉尚雄賞選考委員会委員について

一身上の都合で辞退したスティーヴン・G・ネルソン氏の後任として、井口淳子氏が選任されました。

３）参事および委員委嘱について

本部総務参事として新たに遠藤明日香氏、真鍋幸枝氏、當間亜紀子氏の３名、西日本支部参事として新たに龍城千与枝氏、梶丸岳氏、田村菜々子氏、金銀周氏の４名に委嘱することが承認されました。また、情報委員会委員を新たに塚原健太氏に委嘱することが承認されました。

４）研究生等に対する会費減額措置について

研究生等は、理事会で審査の上、大学院生に準じて会費の減額を認めることできるようになりました（後掲の総会添付書類８参照)。

会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ

◇会費納入のお願い

2009 年度の会費請求書と振替用紙を別便で郵送しました。また 2008 年度分を未納の方にも、請求書を発送ずみです。請求書の金額をお確かめの上､お払い込みください。なお、本誌と行き違いに納入された場合は、どうぞご容赦ください。

◇大学院生の会費割引制度をご利用ください

会費の「減額措置」を受けるためには､申し込み用紙（「大学院生会費減額措置願い」）と学生証のコピー を７月 31 日までに学会事務所に提出してください。年度をさかのぼっての申請はできません。申し込み用紙は学会の HP からダウンロードするか、学会事務所にご請求下さい。なお次年度も減額措置を希望する方は、年度ごとに改めて「減額措置願い」を提出する必要があります。

◇研究生の会費減額制度を新設

研究生は、理事会の審査を経て承認を得た場合に限り、会費の減額が可能となりました。減額措置を受けるには、申し込み用紙（「研究生会費減額措置願い」）と学生証のコピー、履歴書（書式自由） を７月 31 日までに学会事務所に提出してください。申し込み用紙の入手方法、および減額の制度は大学院生の場合と同様です。

◇卒論・修論発表を機に入会された皆様にお願い

本学会では、卒論・修論発表は、入会を申込み、年会費を支払った会員の権利と見なされます。つまり、発表した時点でその年度の会員として登録されていますので、退会届を提出しない限り、継続的に年会費を支払う義務が生じます。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

（尾高暁子）

第27回 田邉尚雄賞アンケートのお願い

◇アンケートのお願い

第 27 回田邉尚雄賞は、下記の要領で選考・授与されます。その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を募集いたします。会員各位のご協力をお願いいたします。

○選考委員：龍村あや子（委員長）、高桑いづみ、
大谷紀美子、茂手木潔子、井口淳子＊
＊S.G.ネルソン委員が都合により辞任され、後任に井口会員が就任。

○対象期間：2009（平成 21）年 1 月 1 日～12 月 31 日

○アンケート締切：2010（平成 22）年 2 月 18 日（木）
必着
対象期間中も随時受け付けます。

○アンケート記入事項：著者名、著書名、発行年月日、発行所名。なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数を記入してください。

○アンケート送り先：
〒110-0005　東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号
（社）東洋音楽学会第 27 回田邉尚雄賞選考委員会

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加
（新名簿発行以降～12 月、訂正箇所は下線部）

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。（機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail 等でも結構です）

◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。

（複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等）

◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

（2009 年 8 月～12 月、到着順）

『ぎふ民俗音楽』第 81 号、特別号 II
岐阜県民俗音楽学会

『楽道』8，9，10,11,12 月号　正派邦楽会

『国立民族学博物館要覧 2009』　国立民族学博物館

『阪大音楽学報』第 7 号　大阪大学音楽学研究室

『「ネットワーク・ミュージッキング―「参照の時代」の音楽文化」双書 音楽文化の現在３』
井手口彰典著　勁草書房

『日本音楽学会会報』第 77 号

『音楽学』第 54 巻 1 号　日本音楽学会

『民俗芸能研究』第 45,46 号　民俗芸能学会

『神楽と出会う本』三上敏視著　アルテスパブリッシング

『北海道立アイヌ民族文化研究センター年報 2008』
北海道立アイヌ民族文化研究センター

『文化人』第 6 号　文化人会

『News Letter』No. 6
早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム

『猿田彦大神フォーラム年報　あらはれ』第 12 号
猿田彦大神フォーラム

『日本でロックが熱かったころ』　井上貴子編著　青弓社

新刊書籍

（ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物）

『淡路人形浄瑠璃と文楽の歴史探訪』
大江恒雄、神戸新聞総合出版センター、1,500 円

『一生青春』　演劇出版社、2,940 円

『エチオピア音楽民族誌：ファラシャ／エチオピア正教／望郷歌（テゼター）』
テイ・カウフマン・シェレメイ（柘植元一訳）
アルク出版、2,300 円

『越境する雅楽文化』　書肆フローラ、6,930 円

『越境する伝統：渡邊守章評論集』
渡邊守章、ダイヤモンド社、6,195 円

『江戸演劇史　上』　渡辺保、講談社、2,940 円

『江戸演劇史　下』　渡辺保、講談社、2,940 円

『江戸の浄瑠璃文化』　神田由築、山川出版社、800 円

『音で観る歌舞伎：舞台裏からのぞいた伝統芸能』
八板賢二郎、新評論、2,940 円

『音楽大学・短大・高校音楽科入試問題集：2009 年度』
音楽之友社、6,825 円

『音楽大学・学校案内　2010 年度：短大・高校・専修』
音楽之友社、2,940 円

『音楽療法・音あそび：統合保育・教育現場に応用する曲集＆活動のしかた』　下川英子、音楽之友社、2,520 円

『楽譜点訳の基本と応用』 川村智子、明石書店、7,140 円

『神楽と出会う本』
三上敏視、アルテスパブリッシング、2,310 円

『荷風と左団次：交情蜜のごとし』
近藤富枝、河出書房新社、1,890 円

『歌舞伎一期一会』
常磐津一巴太夫素語り、NTT 出版、2,200 円

『歌舞伎音楽を知る：一歩入ればそこは江戸』
西川浩平、ヤマハミュージックメディア、1,470 円

『歌舞伎通になる本』　小山観翁、グラフ社、1,575 円

『歌舞伎にすと入門：知る観るＫＡＢＵＫＩ　100 のツボ』
辻和子、東京新聞、1,500 円

『歌舞伎名作事典（新装版）』金沢康隆、青蛙房、3,990 円

『から船往来：日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』
東アジア地域間交流研究会、中国書店、2,800 円

『河原者ノススメ：死穢と修羅の記憶』
篠田正浩、幻戯書房、3,780 円
『鑑賞の授業づくりアイディア集』
坪能克裕、坪能由紀子、高須一、熊木眞見子、中島寿、高倉弘光、駒久美子、味府美香、音楽之友社、2,520 円
『九州の民謡秘話』　山本辰雄、梓書院、1,429 円
『宮中雅楽』　林陽一、小学館、17,000 円
『近代式吟詠名詩集　１』　有信堂高文社、2,625 円
『琴の文化史：東アジアの音風景』
上原作和、勉誠出版、2,100 円
『芸三代心を種として：能楽師関根祥六・祥人・祥丸』
広瀬飛一、関根祥六、小学館スクウェア、3,000 円
『鍵盤指導者による音楽療育活動事例集』
ヤマハミュージックメディア、2,625 円
『元禄上方歌舞伎復元：初代坂田藤十郎幻の舞』
勉誠出版、2,940 円
『猿楽を舞う如く：天下の金山奉行大久保長安』
鬼丸智彦、ブイツーソリューション、1,800 円
『島根の民謡：歌われる古き日本の暮らしと文化』
酒井董美、藤井浩基、三弥井書店、2,300 円
『唱歌・童謡 100 の真実：誕生秘話、謎解き伝説を追う』
竹内貴久雄、ヤマハミュージックメディア、1890 円
『菅原伝授手習鑑：上方文化講座』
大阪市立大学文学研究科、和泉書院、1,995 円
『世阿弥の稽古哲学』 西平直、東京大学出版会、3,150 円
『定本日本浪曲史』
正岡容、大西信行、岩波書店、11,550 円
『童謡・唱歌・わらべうた』
新星出版社編集部、新星出版社、1,260 円
『二代目：聞き書き中村吉右衛門』
小玉祥子、毎日新聞社、1,890 円
『能苑逍遥　中：能という演劇を歩く』
天野文雄、大阪大学出版会、2,205 円
『能狂言が見たくなる講座十撰』
柳沢新治、檜書店、2,100 円
『能とは何か　上：入門篇』
野上豊一郎、書肆心水、4,935 円
『能とは何か　下：専門篇』
野上豊一郎、書肆心水、5,985 円
『能舞台の主人公たち』　権藤芳一、淡交社、2,100 円
『拝啓「平成中村座」様：中村勘三郎一座が綴る歌舞伎への熱き想い』　明緒、世界文化社、1,890 円
『芭蕉布：普久原恒勇が語る沖縄・島の音と光』
普久原恒勇 、磯田健一郎、ボーダーインク、2,100 円
『バリ島ワヤン夢うつつ：影絵人形芝居修業記』
梅田英春、木犀社、2,625 円
『稗搗き節の焼畑と彼岸花の棚田（民謡地図７）』
竹内勉、本阿弥書店、3,675 円
『舞台芸能の伝流：植木行宣芸能文化史論集２』
植木行宣、岩田書院、12,390 円
『名優のごちそう』　戸板康二、皆美社、1,890 円
『夢をつかむ法則：アニャンゴのケニア伝統音楽修業記』
向山恵理子、角川学芸出版、1,470 円
『リアル・キューバ音楽』
ペドロ・バージェ、大金とおる（吉野ゆき子訳）、ヤマハミュージックメディア、2,100 円
『琉球舞踊入門』　那覇出版社、2,100 円

新発売視聴覚資料

（ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物）

●ＤＶＤ
『観世流仕舞入門　２：月』野村四郎、檜書店、4,725 円
『観世流仕舞入門　３：花』野村四郎、檜書店、4,725 円
『高野山の聲明　修正会（ライブ版）』
SAMGHA 、4,200 円

●ＣＤ
『阿吽の音　鳥養潮＋聲明四人の会』 VZCG-729、3,000 円
『今様浄瑠璃「夜叉姫」』　桃山晴衣、VZCG-716、3,000 円
『鬼の女の子守唄』　桃山晴衣、VZCG-718、3,000 円
『オムニバス：決定盤！！正調　東北民謡　ベスト』
PCCK-20048、2,700 円
『「砧」「羽衣」観世寿夫　至花の二曲（2枚組）』
VZCG-8429～8430、 6,000 円
『双調の曲 初世 宮下秀冽 傑作集』 VZCG-733、2,500 円
『曹洞宗大本山永平寺維那　お経』TOCF-8001、1,800 円
『高橋竹山　決定版　高橋竹山：津軽三味線』
VZCG-722、2,000 円
『知名定男　唄魂』　KICS-1485、2,800 円
『土田岳心愛吟集：流星』　COCJ-35935、3,000 円
『鳥居名美野　箏組歌　第三集（2枚組）』
VZCG-8431～2、5,250 円
『二代目米川敏子の響き：箏・三絃オリジナル作品集』
KICH-231、3,000 円

『日本の音風景 100 選まるかじり(2 枚組)』
VZCG-8435～6、3,000 円
『日本音楽の巨匠　現代箏曲　沢井忠夫』
VZCG-726、2,500 円
『日本音楽の巨匠　都山流尺八　山本邦山』
VZCG-725、2,500 円

『日本民謡まるかじり 100　おかわり編(2枚組)』
VZCG-8433～4、3,000 円
『能楽囃子体系』　藤田大五郎他、VZCG-8421、24,990 円
『春の海　宮城道雄の箏』　VZCG-723、2,800 円
『弾き詠み草』　桃山晴衣、VZCG-717、3,000 円
『笛による日本の抒情歌』　VZCG-728、3,000 円
『平家物語』　上原まり、VZCG-727、3,000 円
『民謡　ちゅらぢゅら沖縄』　KICH-229、2,300 円
『民謡　はいさいめんそーれ沖縄』　KICH-228、2,300 円
『紋もよう:加賀山紋の民謡』　VZCG-732、2,000 円
『四世清元梅吉　至芸の世界(2枚組)』
VZCG-8398～8399、5,250 円
『四世清元梅吉　至芸の世界2(2枚組)』
VZCG-8400～8401、5,250 円

編集後記

今号から１月号は発行時期を月末に変更いたしました。第 60 回大会がいくぶん早い時期に開催されましたので、結果的に報告をお待たせする形となりましたが、ご了承ください。

次号は５月 25 日発行予定です。東京学芸大学を会場に開催予定の来年度の大会などについてお知らせいたします。

（横井）

会報編集委員
理事：高桑いづみ、横井雅子
参事：荻野珠、重田絵美、柴田真希、星野厚子、
柳澤久美子、山口かおり

第40回通常総会議事録（抄）・添付書類

１．日時　平成21年10月17日　16：30～18：00
２．場所　沖縄県立芸術大学　第１キャンパス　大講堂
３．出席者　329名　（書面出席　262名を含む）
〔備考〕正会員668名、定足数201名
４．議事事項と審議の経過および結果
定款第25条により金城厚会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長選出を要請し、澤田篤子、金光真理子両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

第１号議案　平成20(2008)年度事業報告の件
遠藤徹理事(総務担当)が「平成20(2008)年度　事業報告」(【添付書類１】)について説明を行い、永原惠三理事(総務担当)がJSTについての補足説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面議決による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第２号議案　平成20(2008)年度収支決算の件
尾高暁子理事(経理担当)が「平成20(2008)年度　収支決算」（【添付書類２】）について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面議決による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第３号議案　平成21(2009)年度８月31日現在財産目録
および貸借対照表の件
尾高暁子理事(経理担当)が「平成21(2009)年度８月31日現在財産目録および貸借対照表」（【添付書類３】）について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面議決による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第４号議案　平成21(2009)年８月31日現在会員異動状況
の件
遠藤徹理事(総務担当)が「平成21(2009)年度８月31日現在会員異動状況」（【添付書類４】）について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面議決による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。また、徳丸吉彦監事が「監査報告書（【添付書類7】）を朗読説明した。

第５号議案　平成21(2009)年度事業計画の件
遠藤徹理事(総務担当)が「平成21(2009)年度　事業計画」（【添付書類５】）について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面議決による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第６号議案　平成21(2009)年度収支予算の件
尾高暁子理事(経理担当)が「平成21(2009)年度　収支予算」（【添付書類６】）について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面議決による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第７号議案　定款施行細則変更の件
尾高暁子理事が「定款施行細則変更案」(【添付書類８】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面議決による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

・・

[以下、添付書類]
【添付資料１】平成20年度（2008年度）事業報告
（自平成20年（2008年）9月1日 至平成21年（2009年）8月31日）

１．事業の状況
〔１〕研究発表会および学術講演会の開催（定款第５条１）
⑴公開講演会の実施（定款施行細則第３条１）
・日時 2008年11月15日
・会場 武蔵野音楽大学
・課題 「板橋の田遊び（赤塚諏訪神社）」および「日本音楽研究の学際化と国際化」
⑵研究発表大会の実施（定款施行細則第３条２）
・日時 2008年11月16日
・会場 武蔵野音楽大学
・発表件数 19件
⑶次年度大会の準備
・日時 2009年10月17日～18日
・会場 沖縄県立芸術大学
⑷定例研究会（定款施行細則第３条３）
〇東日本支部
・回数 6回（第40回～第45回 12・2・3・4・6・7月）
・会場 東京芸術大学、お茶の水女子大学、有明教育芸術短期大学、大東文化大学
・内容 研究発表、展望、卒業論文・修士論文・博士論文発表

・備考 7月（第45回）の定例研究会は日本音楽学会関東支部と合同。

○西日本支部

・回数 5回（第240回～第244回 9・11・3・5・6月）

・会場 神戸大学、京都教育大学、国立民族学博物館、大阪市立大学、京都市立芸術大学

・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表、映像上映と討論、講演

・備考 5月（第243回）の定例研究会は日本音楽学会関西支部と合同。

○沖縄支部

・回数 2回（第52回～第53回 4・6月）

・会場 沖縄県立芸術大学

・内容 卒論論文発表、調査報告、講演

〔２〕学会誌および学術図書の刊行（定款第５条２）

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行（定款施行細則第３条４）

○第74号の編集・刊行

・内容 会員の論文、研究ノート、書評、彙報

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

・第74号（2008年9月）、第75号（2009年1月）、第76号(2009年5月)

・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・ 視聴覚資料紹介、会員消息

［第40回総会　添付資料１］

○『東日本支部だより』

・第18号（2008年11月）、第19号（2009年3月）、第20号（2009年6月）

・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

・第63号（2009年1月）、第64号（2009年5月）、第65号（2009年8月）

・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

・発行なし

〔３〕関連学協会との連絡および協力（定款第５条３）

(7)日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8)音楽文献目録委員会への参加

○会員千葉優子氏、横井雅子氏、蒲生美津子氏を委員として派遣

(9)国際伝統音楽学会（ICTM）への協力

○日本国内委員会として加盟

(10)藝術学関連学会連合への参加

○会員遠藤徹氏（2009年3月まで）、金城厚氏（2009年4月より）を委員として派遣

〔４〕研究の奨励および研究業績の表彰（定款第５条４）

(11)「田邉尚雄賞」（定款施行細則第３条５）

○第25回田邉尚雄賞の授賞

・日時 2008年11月15日

・受賞者および受賞対象

ジェラルド・グローマー『瞽女と瞽女唄の研究 研究篇・史料篇』(名古屋大学出版会、2007年2月発行)

谷正人『イラン音楽 声の文化と即興』ＣＤ付き（青土社、2007年7月発行）

○第26回田邉尚雄賞の選考と発表

・受賞者および受賞対象

田中多佳子『ヒンドゥー教徒の集団歌謡―神と人の連鎖構造』(世界思想社、2008年2月発行)

〔５〕研究および調査（定款第５条５）

(12)国内または国外における学術調査および研究とくになし

〔６〕その他目的を達成するために必要な事項（定款第５条６）

(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14)独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業への参加応募

（以下、省略）

【添付書類５】 平成21年度（2009年度）事業計画

（自平成21年（2009年）9月1日 至平成22年（2010年）8月31日）

〔１〕研究発表会および学術講演会の開催（定款第５条１）

(1)公開講演会の実施（定款施行細則第３条１）

・日時 2009年10月17日

・会場 沖縄県立芸術大学

・課題 「人の移動と音楽」

(2)研究発表大会の実施（定款施行細則第３条２）

・日時 2009年10月18日

・会場 沖縄県立芸術大学

・発表件数23件

(3)次年度大会の準備

・日時 2010年10月（予定）

・会場 未定

(4)定例研究会（定款施行細則第３条３）

○東日本支部

・回数 6回（第46回～第51回 9・12・3・4・6・7月）
・会場 お茶の水女子大学ほか
・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか
○西日本支部
・回数 5回（第245回～第249回 12・2・4・5・6月）
・会場 京都教育大学ほか
・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
○沖縄支部
・回数 3回（第54回～第56回 12・4・7月）
・会場 沖縄県立芸術大学
・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
〔２〕学会誌および学術図書の刊行（定款第５条２）
(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行（定款施行細則第３条４）
○第75号の編集・刊行
・内容 会員の論文、研究ノート、研究動向、書評・視聴覚資料評・書籍紹介・視聴覚資料紹介ほか
(6)会報の刊行
○『東洋音楽学会会報』
・第77号（2009年9月）、第78号（2010年1月）、第79号(2010年5月)
・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息
○『東日本支部だより』
［第40回総会 添付書類５］
・第21号（2009年11月）、第22号（2010年3月）、第23号（2010年6月）
・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
○『西日本支部だより』
・第66号（2010年1月）、第67号（2010年4月）、第68号（2010年8月）
・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか
○『沖縄支部通信』
・第34号（2009年12月）、第35号（2010年7月）
・内容 例会案内、発表内容・質疑記録
〔３〕関連学協会との連絡および協力（定款第５条３）
(7)日本学術会議への協力
○日本学術会議協力学術研究団体として協力
(8)音楽文献目録委員会への参加
○会員三名を委員として派遣
(9)国際伝統音楽学会（ICTM）への協力
○日本国内委員会として加盟
(10)藝術学関連学会連合への参加
○会員一名を委員として派遣
〔４〕研究の奨励および研究業績の表彰（定款第５条４）
(11)「田邉尚雄賞」（定款施行細則第３条５）
○第26回田邉尚雄賞の授賞
・日時 2009年10月17日
・受賞者および受賞対象
田中多佳子『ヒンドゥー教徒の集団歌謡―神と人の連鎖構造』(世界思想社、2008年2月発行)
○第27回田邉尚雄賞の選考と発表
(2010年４月予定)
〔５〕研究および調査（定款第５条５）
(12)国内または国外における学術調査および研究
とくになし
〔６〕その他目的を達成するために必要な事項
（定款第５条６）
(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
(14)独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業への参加

【添付書類２】

収　支　計　算　書

平成20年9月1日から平成21年8月31日まで

社団法人　東洋音楽学会　（単位 円）

科　目	予算額	決算額	増減	備考
Ⅰ　事業活動収支の部				
1.事業活動収入				
① 基本財産運用収入	22,000	20,691	1,309	
基本財産利息収入	22,000	20,691	1,309	
② 会費収入	5,800,000	5,713,025	86,975	
正会員会費収入	5,280,000	5,213,025	66,975	
賛助会員会費収入	300,000	300,000	0	
特別会員会費収入	220,000	200,000	20,000	
③ 事業収入	510,000	456,000	54,000	
機関誌発行事業収入	500,000	456,000	44,000	
その他事業収入	10,000	0	10,000	
④ 雑収入	40,000	29,952	48	
受取利息	30,000	29,952	48	
雑収入	10,000	0		
⑤ 繰入金収入	0	185,748	Δ185,748	
大会特別会計収入	0	185,748	Δ185,748	
事業活動収入計	6,372,000	6,405,416	Δ43,416	
2.事業活動支出				
① 事業費	5,918,000	5,178,425	739,575	
機関誌作成費	1,200,000	1,176,686	23,314	
負担金	200,000	187,000	13,000	
印刷費	200,000	86,100	113,900	
広報普及費	450,000	441,685	8,315	
給料手当	1,440,000	1,286,363	153,637	
田邉尚雄賞賞金等	150,000	133,770	16,230	
通信費	450,000	453,972	Δ3,972	
旅費交通費	350,000	225,130	124,870	
会議費	200,000	26,255	173,745	
事務用品費	63,000	32,592	30,408	
事務所費	765,000	715,676	49,324	
事務委託費	360,000	360,000	0	
雑費	90,000	53,196	36,804	
② 管理費	352,000	322,437	29,563	
給料手当	160,000	142,928	17,072	
通信費	50,000	50,434	Δ434	
事務用品費	7,000	3,620	3,380	
本部事務所費	0	0	0	
事務所費	85,000	79,516	5,484	
事務委託費	40,000	40,000	0	
雑費	10,000	5,939	4,061	
③ 支部繰入金支出	1,000,000	807,726	192,274	
東日本支部繰入金	540,000	416,170	123,830	
西日本支部繰入金	400,000	383,605	16,395	
沖縄支部繰入金	60,000	7,951	52,049	
④ 繰入金支出	200,000	0	200,000	
大会特別会計支出	200,000	0	200,000	
事業活動支出計	7,470,000	6,308,588	1,161,412	
事業活動収支差額	Δ1,098,000	96,828	Δ1,204,828	
Ⅱ　投資活動収支の部				
1.投資活動収入				
① 特定資産等取崩収入				
田邉尚雄賞基金取崩収入	150,000	150,000	0	
支払準備基金取崩収入	1,000,000	867,323	132,677	
投資活動収入計	1,150,000	1,017,323	132,677	
2.投資活動支出				
① 特定資産等繰入支出				
建物取得準備預金繰入支出	0	1,586	Δ1,586	
支払準備基金繰入支出	0	666,697		
研究推進事業基金繰入支出	0	2,925	Δ2,925	
投資活動支出計	0	671,208	Δ4,511	
投資活動収支差額	1,150,000	346,115	137,188	
Ⅲ　予備費支出	52,000	－	52,000	
当期収支差額	0	442,943	Δ442,943	
前期繰越収支差額	1,511,186	1,511,186	0	
次期繰越収支差額	1,511,186	1,954,129	Δ442,943	

収支計算書に対する注記

１．資金の範囲について

資金の範囲は現金、預金、未収入金、前渡金及び未払金、預り金、前受金を含めている。
なお前期末及び当期末残高は下記２に記載するとおりである。

２．次期繰越収支差額の内訳は次のとおりである。

次期繰越収支差額の内訳　　（単位 円）

項目	前期	当期
現　金　預　金	1,303,186	1,150,129
未　収　入　金	450,000	906,000
前　　渡　　金	200,000	200,000
未　　払　　金	200,000	100,000
預　　り　　金	10,000	10,000
前　　受　　金	232,000	192,000
次期 繰 越 収 支 差 額	1,511,186	1,954,129

総 括 収 支 計 算 書

平成20年9月1日から平成21年8月31日まで

社団法人　東洋音楽学会　　（単位 円）

科　　目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合　計
Ⅰ　事業活動収支の部							
1.事業活動収入							
① 基本財産運用収入	20,691	0	0	0	0	0	20,691
基本財産利息収入	20,691						20,691
② 会　費　収　入	5,713,025	912,550	0	0	0	0	6,625,575
正会員会費収入	5,213,025						5,213,025
賛助会員会費収入	300,000						300,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		501,000					501,000
その他の収入		411,550					411,550
③ 事　業　収　入	456,000	750,000	0	0	3,000	0	1,209,000
機関誌発行事業収入	456,000						456,000
そ の 他 事業収入	0	750,000			3,000		753,000
④ 雑　収　入	29,952	0	261	96	49	0	30,358
受 取 利 息	29,952		261	96	49		30,358
⑤ 繰入金収入	185,748	0	416,170	383,605	7,951	Δ993,474	0
事業活動収入計	6,405,416	1,662,550	416,431	383,701	11,000	Δ993,474	7,885,624
2.事業活動支出							
① 事　業　費	5,178,425	1,476,802	416,431	383,701	11,000	0	7,466,359
機関誌作 成 費	1,176,686						1,176,686
負　担　金	187,000						187,000
印　刷　費	86,100	332,587	120,770	162,288	0		701,745
例 会 運 営 費	0		39,698	20,750	10,000		70,448
広 報 普 及 費	441,685						441,685
田邉尚雄賞賞金等	133,770						133,770
通　信　費	453,972	60,305	186,190	143,480	1,000		844,947
旅 費 交 通 費	225,130	73,220	5,580	25,335			329,265
給　　料	1,286,363	169,686	21,600	3,000			1,480,649
事 務 用 品 費	32,592	68,297	30,232	1,020			132,141
事　務　所　費	715,676						715,676
事 務 委 託 費	360,000						360,000
会　議　費	26,255	0	10,366	25,887			62,508
会　場　費	0	144,525					144,525
謝　　金	0	233,840					233,840
そ　の　他	53,196	394,342	1,995	1,941			451,474
② 管　理　費	322,437						322,437
給 料 手 当	142,928						142,928
通　信　費	50,434						50,434
事 務 用 品 費	3,620						3,620
事　務　所　費	79,516						79,516
事 務 委 託 費	40,000						40,000
雑　　費	5,939						5,939
③ 支部繰入金支出	807,726					Δ807,726	0
④ 繰 入 金 支 出	0	185,748				Δ185,748	0
事業活動支出計	6,308,588	1,662,550	416,431	383,701	11,000	Δ993,474	7,788,796
事業活動収支差額	96,828	0	0	0	0	0	96,828
Ⅱ　投資活動収支の部							
1.投資活動収入							
特定基金取崩収入	1,017,323						1,017,323
投資活動収入計	1,017,323						1,017,323
2.投資活動支出							
特定基金等繰入支出	671,208						671,208
投資活動支出計	671,208						671,208
投資活動収支差額	346,115						346,115
Ⅲ　予備費支出	－						0
当期収支差額	442,943	0	0	0	0	0	442,943
前期繰越収支差額	1,511,186						1,511,186
次期繰越収支差額	1,954,129	0	0	0	0	0	1,954,129

【添付書類３】

貸　借　対　照　表

平成21年8月31日 現在

社団法人　東洋音楽学会　（単位：円）

科　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	1,150,129	1,303,186	△ 153,057
未収入金	906,000	450,000	456,000
前 渡 金	200,000	200,000	0
流動資産合計	2,256,129	1,953,186	302,943
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	5,200,000	5,200,000	0
基本財産合計	5,200,000	5,200,000	0
(2) 特定資産			
支払準備基金	3,802,650	4,003,276	△ 200,626
研究推進事業基金	4,525,200	4,522,275	2,925
田邉尚雄基金	3,350,000	3,500,000	△ 150,000
特定資産合計	11,677,850	12,025,551	△ 347,701
(3) その他固定資産			
什器備品	161,880	194,802	△ 32,922
楽器	0	8	△ 8
書籍	310,600	310,600	0
建物取得準備預金	1,819,741	1,818,155	1,586
差入敷金	300,000	300,000	0
電話加入権	149,968	149,968	0
その他固定資産合計	2,742,189	2,773,533	△ 31,344
固定資産合計	19,620,039	19,999,084	△ 379,045
資　産　合　計	**21,876,168**	**21,952,270**	**△ 76,102**
Ⅱ 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	100,000	200,000	△ 100,000
預り金	10,000	10,000	0
前受金	192,000	232,000	△ 40,000
流動負債合計	302,000	442,000	△ 140,000
負　債　合　計	**302,000**	**442,000**	**△ 140,000**
Ⅲ 正味財産の部			
1. 一般正味財産	21,574,168	21,510,270	63,898
（うち基本財産への充当額）	(5,200,000)	(5,200,000)	(0)
（うち特定資産への充当額）	(11,677,850)	(12,025,551)	(△347,701)
正味財産合計	**21,574,168**	**21,510,270**	**63,898**
負債及び正味財産合計	**21,876,168**	**21,952,270**	**△ 76,102**

正味財産増減計算書総括表

平成20年9月1日から平成21年8月31日まで

社団法人　東洋音楽学会　（単位 円）

科　　目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合　計
Ⅰ一般正味財産増減の部							
経常増減の部							
(1) 経常収益							
① 基本財産運用収入	20,691	0	0	0	0	0	20,691
基本財産利息収入	20,691						20,691
② 会　費　収　入	5,713,025	912,550	0	0	0	0	6,625,575
正会員会費収入	5,213,025						5,213,025
賛助会員会費収入	300,000						300,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		501,000					501,000
その他の収入		411,550					411,550
③ 事　業　収　入	456,000	750,000	0	0	3,000	0	1,209,000
機関誌発行事業収入	456,000						456,000
そ の 他 事業収入	0	750,000			3,000		753,000
④ 雑　収　入	29,952	0	261	96	49	0	30,358
受 取 利 息	29,952		261	96	49		30,358
雑　収　入	0						0
⑤ 繰入金収入	185,748	0	416,170	383,605	7,951	Δ993,474	0
経常収益計	6,405,416	1,662,550	416,431	383,701	11,000	Δ993,474	7,885,624
(2) 経常費用							
① 事　業　費	5,208,055	1,476,802	416,431	383,701	11,000	0	7,495,989
機関誌作 成 費	1,176,686						1,176,686
負　担　金	187,000						187,000
印　刷　費	86,100	332,587	120,770	162,288			701,745
広 報 普 及 費	441,685						441,685
例 会 運 営 費			39,698	20,750	10,000		70,448
田邉尚雄賞金等	133,770						133,770
通　信　費	453,972	60,305	186,190	143,480	1,000		844,947
旅 費 交 通 費	225,130	73,220	5,580	25,335			329,265
給　　料	1,286,363	169,686	21,600	3,000			1,480,649
事 務 用 品 費	32,592	68,297	30,232	1,020			132,141
事　務　所　費	715,676						715,676
事 務 委 託 費	360,000						360,000
会　議　費	26,255	0	10,366	25,887			62,508
会　場　費		144,525					144,525
謝　　金		233,840					233,840
そ　の　他	53,196	394,342	1,995	1,941			451,474
減 価 償 却 費	29,630						29,630
② 管　理　費	325,729						325,729
給　料　手　当	142,928						142,928
通　信　費	50,434						50,434
事 務 用 品 費	3,620						3,620
本 部 事務所費	79,516						79,516
事 務 委 託 費	40,000						40,000
雑　　費	5,939						5,939
減 価 償 却 費	3,292						3,292
③ 支部繰入金支出	807,726					Δ807,726	0
④ 繰 入 金 支 出	0	185,748				Δ185,748	0
経常費用計	6,341,510	1,662,550	416,431	383,701	11,000	Δ993,474	7,821,718
当期経常増減額	63,906	0	0	0	0	0	63,906
経常外増減の部							
(1) 経常外費用							
固定資産除却損	8						8
経常外費用計	8						8
当期経常外増減額	Δ8						Δ8
当期一般正味財産増減額	63,898	0	0	0	0	0	63,898
一般正味財産期首残高	21,510,270	0	0	0	0	0	21,510,270
一般正味財産期末残高	21,574,168	0	0	0	0	0	21,574,168
Ⅱ正味財産期末残高	21,574,168	0	0	0	0	0	21,574,168

財務諸表に対する注記

１．重要な会計方針

（1）有価証券の評価基準及び評価方法

移動平均法による原価法

（2）棚卸資産の評価基準及び評価方法

移動平均法による原価法

（3）固定資産の減価償却の方法

定額法

（4）消費税等の会計処理

税込み方式

２．基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

（単位円）

科　　目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
定期預金	5,200,000			5,200,000
小　計	5,200,000	0	0	5,200,000
特定資産				
支払準備基金				
定期預金	1,000,000	0	0	1,000,000
郵便貯金	1,291,598	2,389		1,293,987
普通預金	867,323	663,718	867,323	663,718
定期貯金	844,355	590		844,945
研究推進事業基金				
定期貯金	4,522,275	2,925		4,525,200
田邉尚雄賞基金				
定期預金	3,500,000		150,000	3,350,000
小　計	12,025,551	669,622	1,017,323	11,677,850
合　　計	17,225,551	669,622	1,017,323	16,877,850

３.基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等は、次のとおりである。

（単位円）

科　　目	当期末残高	（うち指定正味財産からの充当額）	（うち一般正味財産からの充当額）	（うち負債に対応する額）
基本財産				
定期預金	5,200,000		5,200,000	
小　計	5,200,000		5,200,000	
特定資産				
支払準備基金				
定期預金	1,000,000		1,000,000	
郵便貯金	1,293,987		1,293,987	
普通預金	663,718		663,718	
定期貯金	844,945		844,945	
研究推進事業基金				
定期貯金	4,526,200		4,526,200	
田邉尚雄賞基金				
定期預金	3,350,000		3,350,000	
小　計	11,678,850		11,678,850	
合　　計	16,878,850		16,878,850	

４.担保に供している資産

なし

５．固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

（単位円）

科　　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高	備　　考
什器備品	576,312	414,432	161,880	
書　　籍	310,600	0	310,600	
合　　計	886,912	414,432	472,480	

以上

財　産　目　録

社団法人　東洋音楽学会　　平成21年8月31日 現在　　（単位 円）

科　目	金　額		
Ⅰ 資 産 の 部			
１流 動 資 産			
現 金 預 金			
現 金　現金手許有高	43,793		
振替口座　郵便振替口座	615,344		
普通預金　三菱東京UFJ銀行日本橋支店	298,718		
各支部　現金、預金	192,274		
計	1,150,129		
未収入金			
アカデミア　機関誌販売代金	906,000		
計	906,000		
前 渡 金			
第60回大会費用前渡	200,000		
計	200,000		
流 動 資 産 合 計		2,256,129	
２固 定 資 産			
(1)基 本 財 産			
定期預金			
三菱UFJ信託銀行上野支店	5,200,000		
基 本 財 産 合 計	5,200,000		
(2)特定資産			
支払準備基金			
定期預金　三菱UFJ信託銀行上野支店	1,000,000		
通常郵便貯金　上野黒門郵便局	1,293,987		
普通預金　三菱UFJ信託銀行上野支店	663,718		
定額郵便貯金　上野黒門郵便局	844,945		
計	3,802,650		
研究推進事業基金			
定額郵便貯金　上野黒門郵便局	4,525,200		
計	4,525,200		
田邉尚雄賞基金			
定期預金　三菱UFJ信託銀行上野支店	3,350,000		
計	3,350,000		
基 金 合 計	11,677,850		
(3)その他の固定資産			
什 器 備 品（事務用機器等）	161,880		
書 籍	310,600		
建物取得準備特定預金			
定額郵便貯金　上野黒門郵便局	1,819,741		
差 入 敷 金			
事務所敷金	300,000		
電 話 加 入 権			
本部電話加入権　2本	149,968		
その他の固定資産合計	2,742,189		
固 定 資 産 合 計		19,620,039	
資 産 合 計			21,876,168
Ⅱ 負 債 の 部			
未 払 金			
田邉賞未払	100,000		
預 り 金			
源泉所得税預り	10,000		
前 受 金			
平成21年度以降会費前受	192,000		
流 動 負 債 合 計		302,000	
負 債 合 計			302,000
正 味 財 産			21,574,168

【添付書類４】

会員の異動状況（平成20年. 9. 1～平成21年. 8. 31 ）

●印・・・東日本支部
◆印・・・西日本支部
■印・・・沖縄支部
#印・・・海外在住

会員種別	員　数		増減	異　動　の　内　訳
	(2008年) 08. 9. 1	(2009年) 09. 8. 31		
正会員	661	668	+7	新入+20、学生より+8、退会−20、逝去−1
学生会員	10	10	0	新入+8、正会員へ−8
賛助会員	2	2	0	
特別会員	8	8	0	
名誉会員	3	3	0	
	684	691	+7	

【添付資料７】

監　査　報　告　書

社団法人 東 洋 音 楽 学 会
会 長　　金　城　　厚　殿

平成 21 年 9 月 24 日
監 事　　蒲生　郷昭
監 事　　徳丸　吉彦

私たちは、平成 20 年 9 月 1 日から平成 21 年 8 月 31 日までの平成 20 年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

１．監査の方法の概要

(1)　会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。

(2)　業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

２．監査意見

(1)　平成 20 年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。

(2)　事業報告書の内容は真実であると認める。

(3)　理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上

【添付書類６】

収　支　予　算　書

平成21年9月1日から平成22年8月31日まで

（単位 円）

科　　目	予 算 額	前期当初予算	増　　減	備　　考
Ⅰ　事業活動収支の部				
1.事業活動収入				
① 基本財産運用収入	20,000	22,000	Δ2,000	
基本財産利息収入	20,000	22,000	Δ2,000	
② 会　費　収　入	5,760,000	5,800,000	Δ40,000	
正会員会費収入	5,360,000	5,280,000	80,000	
賛助会員会費収入	200,000	300,000	Δ100,000	
特別会員会費収入	200,000	220,000	Δ20,000	
③ 事　業　収　入	510,000	510,000	0	
機関誌発行事業収入	500,000	500,000	0	
そ の 他 事業収入	10,000	10,000	0	
④ 雑　収　入	40,000	40,000	0	
受 取 利 息	30,000	30,000	0	
雑　収　入	10,000	10,000	0	
事業活動収入計	6,330,000	6,372,000	Δ42,000	
2.事業活動支出				
① 事　業　費	5,673,000	5,918,000	Δ245,000	
機関誌作 成 費	1,200,000	1,200,000	0	
負　　担　　金	200,000	200,000	0	
印　　刷　　費	250,000	200,000	50,000	
広 報 普 及 費	250,000	450,000	Δ200,000	
給　料　手　当	1,440,000	1,440,000	0	
田邉尚雄賞賞金等	150,000	150,000	0	
通　　信　　費	450,000	450,000	0	
旅 費 交 通 費	400,000	350,000	50,000	
会　　議　　費	100,000	200,000	Δ100,000	
事 務 用 品 費	63,000	63,000	0	
事　務　所　費	720,000	765,000	Δ45,000	
事 務 委 託 費	360,000	360,000	0	
雑　　費	90,000	90,000	0	
② 管　理　費	347,000	352,000	Δ5,000	
給　料　手　当	160,000	160,000	0	
通　　信　　費	50,000	50,000	0	
事 務 用 品 費	7,000	7,000	0	
事　務　所　費	80,000	85,000	Δ5,000	
事 務 委 託 費	40,000	40,000	0	
雑　　費	10,000	10,000	0	
③ 支部繰入金支出	1,000,000	1,000,000	0	
東日本支部繰入金	540,000	540,000	0	
西日本支部繰入金	400,000	400,000	0	
沖縄支部繰入金	60,000	60,000	0	
④ 繰 入 金 支 出	200,000	200,000	0	
大会特別会計支出	200,000	200,000	0	
事業活動支出計	7,220,000	7,470,000	Δ250,000	
事業活動収支差額	Δ890,000	Δ1,098,000	208,000	
Ⅱ　投資活動収支の部				
1.投資活動収入				
① 特定基金取崩収入	5,772,391	1,150,000	4,622,391	
田邉尚雄賞基金取崩収入	150,000	150,000	0	
支払準備基金取崩収入	3,802,650	1,000,000	2,802,650	
建物取得準備預金取崩収入	1,819,741	0	1,819,741	
投資活動収入計	5,772,391	1,150,000	4,622,391	
2.投資活動支出				
① 特定基金繰入支出	4,782,391	0	4,782,391	
研究推進事業基金繰入支出	4,782,391	0	4,782,391	
投資活動支出計	4,782,391	0	4,782,391	
投資活動収支差額	990,000	1,150,000	Δ160,000	
Ⅲ　財務活動収支の部				
1.財務活動収入	0	0	0	
2.財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
Ⅳ　予備費支出	100,000	52,000	48,000	
当期収支差額	0	0	0	
前期繰越収支差額	1,954,129	1,511,186	442,943	
次期繰越収支差額	1,954,129	1,511,186	442,943	

総 括 収 支 予 算 書

平成21年9月1日から平成22年8月31日まで

社団法人　東洋音楽学会　（単位 円）

科　　目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	調　整	合　計
Ⅰ　事業活動収支の部							
1. 事業活動収入							
① 基本財産運用収入	20,000	0	0	0	0	0	20,000
基本財産利息収入	20,000						20,000
② 会　費　収　入	5,760,000	620,000	0	0	0	0	6,380,000
正会員会費収入	5,360,000						5,360,000
賛助会員会費収入	200,000						200,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		320,000					320,000
その他の収入		300,000					300,000
③ 事　業　収　入	510,000	500,000	0	0	3,000	0	1,013,000
機関誌発行事業収入	500,000						500,000
そ の 他 事業収入	10,000	500,000			3,000		513,000
④ 雑　収　入	40,000	0	0	0	0	0	30,000
受 取 利 息	30,000						30,000
雑　収　入	10,000						
⑤ 繰入金収入	0	200,000	540,000	400,000	60,000	Δ1,200,000	0
事業活動収入計	6,330,000	1,320,000	540,000	400,000	63,000	Δ1,200,000	7,443,000
2. 事業活動支出							
① 事　業　費	5,673,000	1,300,000	540,000	400,000	63,000	0	7,976,000
機関誌作 成 費	1,200,000						1,200,000
負　担　金	200,000						200,000
印　刷　費	250,000	400,000	190,000	130,000	20,000		990,000
広 報 普 及 費	250,000						250,000
例 会 運 営 費	0		90,000	80,000	20,000		190,000
給　　料	1,440,000	100,000	20,000	15,000	5,000		1,580,000
田邉尚雄賞賞金等	150,000						150,000
通　信　費	450,000	30,000	200,000	130,000	10,000		820,000
旅 費 交 通 費	400,000	160,000	10,000	30,000	1,000		601,000
会　議　費	100,000	10,000	10,000	5,000	1,000		126,000
事 務 用 品 費	63,000		15,000	5,000	5,000		88,000
会　場　費	0	400,000					400,000
謝　　金	0	100,000					100,000
事　務　所　費	720,000						720,000
事 務 委 託 費	360,000						360,000
そ　の　他	90,000	100,000	5,000	5,000	1,000		201,000
② 管　理　費	347,000						347,000
給 料 手 当	160,000						160,000
通　信　費	50,000						50,000
事 務 用 品 費	7,000						7,000
本 部 事務所費	80,000						80,000
事 務 委 託 費	40,000						40,000
雑　　費	10,000						10,000
③ 支部繰入金支出	1,000,000					Δ1,000,000	0
④ 繰 入 金 支 出	200,000					Δ200,000	0
事業活動支出計	7,220,000	1,300,000	540,000	400,000	63,000	Δ1,200,000	8,323,000
事業活動収支差額	Δ890,000	20,000	0	0	0	0	Δ870,000
Ⅱ　投資活動収支の部							
1. 投資活動収入							
特定基金等取崩収入	5,772,391						5,772,391
投資活動収入計	5,772,391						5,772,391
2. 投資活動支出							
特定基金繰入支出	4,782,391						4,782,391
投資活動支出計	4,782,391						4,782,391
投資活動収支差額	990,000						990,000
Ⅲ　財務活動収支の部							
1. 財務活動収入	0						0
2. 財務活動支出	0						0
財務活動収支差額	0						0
Ⅳ　予備費支出	100,000	20,000					120,000
当期収支差額	0	0	0	0	0	0	0
前期繰越収支差額	1,954,129						1,954,129
次期繰越収支差額	1,954,129	0	0	0	0	0	1,954,129

【添付資料８】

定款施行細則変更案

新	旧
第5条　正会員のうち、会費 50 年分以上に相当する金額をまとめて寄付した者については、会費を終身免除する。 （中略） ４　正会員のうち、大学院生は、一定の手続きを経て会費の減額措置を受けることができる。その場合の会費は6,000円とする。 ５　正会員のうち、研究生等は、理事会で審査の上、前項に準じて会費の減額を認めることがある。	第５条　正会員のうち、会費50年分以上に相当する金額をまとめて寄付した者については、会費を終身免除する。 （中略） ４　正会員のうち、大学院生は、一定の手続きを経て会費の減額措置を受けることができる。その場合の会費は6,000円とする。
第23条　本細則は昭和44年10月12日より施行する。 （中略） 20　本細則の変更は平成19年11月18日より施行する。ただし、第５条第４項は平成20年９月１日より実施する。 21　本細則の変更は平成21年9月1日より施行する。	第24条　本細則は昭和44年10月12日より施行する。 （中略） 20　本細則の変更は平成19年11月18日より施行する。ただし、第５条第４項は平成20年９月１日より実施する。